

(書評者)
精神科医 (ACT-K) /
京都・一乗寺プリュワリー代表
高木俊介

『精神医療の専門性 「治す」とは異なるいくつかの試み』

近田真美子＝著

2024年3月発行
2,200円(本体2,000円+税10%) 医学書院



地域のすべての支援者への贈り物として

僕らが ACT (包括型地域生活支援プログラム) を京都で始めて、ちょうど 20 年になる。ただただこの国の閉塞した精神医療、福祉に風穴を開けたくて、ひた走ってきた。10 年も過ぎた頃、その熱意だけの実践に行き詰まりが見え、組織に綻びが生じはじめたことに気づき、持続のための模索をはじめ、今、ようやく僕らの ACT-K は第二のスタートラインに立ったところだ。

そんなとき、僕らの実践にはじまりから注目し続けてくれていた近田真美子さんから、素敵な贈り物が届いた。彼女は、僕らの「ユニークな実践」を単に個人の力量という特殊一回性のものとして片付けてしまうのではなく、スタッフ個人々人への膨大なインタビューを現象学的に分析して「彼らが事象をどのように意味づけていたのか、経験の内側から眼差し」してくれた。精神医療の専門性がその眼差しによって問い直され、「再び人々の人生を支える杖」として甦るのだ。

僕が自分で書いたり話したりしているのは、社会に精神医療改革を求めるアジェンションであり、自分自身の日常の実践を詳しく語ることはあまりしない。な

ぜなら、自分の行いを本人が公に語るとき、特に対人支援の実践では無意識の美化や偏りが避けられず、ほんとうに大切なところは自身の主張から外れたところにあるからだ。

そして、あらゆる新しい実践は、高らかな理念を掲げていても、足元の現実の中からしか立ち上がらない。この現実という泥の中に首までつかったまま、実際に成し遂げられることは、小さい。語れば語るほど、奢りと陳腐化が生まれ、組織は硬直する。だが、語られない実践はこの現実の旧弊な土壌に埋もれる。行い継がれることなく、消える。精神医療はそうやって、あらゆる抵抗と試みを呑み込んで停滞してきた。

近田さんの本書は、僕らだけでは埋もれるままにしておけなかった僕らの試みを、僕らの知らないどこか遠くにまで運ぶ。『「治す」とは異なるいくつかの試み』という不思議な種を、多くの場所で芽吹かせてほしい。僕ら自身もまた、彼女の眼差しの中に自分たちの知らなかった自分たちを知り、新しい歩みをはじめめる。

ありがとう、こんちゃん。

精